みのむかし話

その11

吉津のむかし話

庄屋と娘と竜

昔、雨が何日も降らず田植えもできず、畑もカラカラ飲み水にも困った。

庄屋が山奥の池に行き、そこに住む竜に「雨を降らせてくれ」と頼むと、竜は自分の一番ほしいものをくれたら雨を降らせるという。雨のことで頭がいっぱいの庄屋は、「その通りにするからどうぞ雨を降らせてほしい」と頼んだ。竜は快く引き受けてくれた。

庄屋が帰る途中、一天にわかにかき曇り、すごい雷鳴と共に大雨が降り出した。村の人々はやっと生気を取り戻した。

その翌朝、若い男が庄屋を訪ねて来て、約束のものを受け取りに来たという。やはり竜が来たのかとどきりとするが、約束は約束であり追い返すわけにはゆかない。

庄屋には三人の娘があった。一番上の娘に「お嫁に行くかい」というと、いやだという。中の娘もいやだという。

末娘にいうと、「お嫁に行くからお経の本と針千本とひょうたんを用意してつか」という。

末娘が花嫁姿で池の堤（つつみ）に立っていると、池の中から「はよ来い、はよ来い」と招く。娘は「これを沈めてくれたら行く」といい、ひょうたんを池に投げ込む。竜は「なんだ、こんなもの」と馬鹿にして沈めようとするが、沈めたと思うとすぐポンポンと浮き上がり、いくら押さえつけても沈めることはできない。

竜が疲れてふらふらになっているところへ、千本の針を投げつけると、針は竜の全身にあたり、竜は池の水を真っ赤に染め、のたうちまわって死んでしまった。

それから、娘はぼろの着物に着がえ、顔に鍋墨を塗って遠くの村の大きい屋敷に行き、召使いにしてもらった。影日向なくよく働くので「お鍋お鍋」と、みんなから可愛がられた。

彼女は夜おそくいちばん最後に風呂に入り、化粧をして晴れ着をつけ、殺した竜の霊を慰めるためにお経を読んでいた。

ところが、ある夜のこと、その家の若旦那が遅く帰ると、女中部屋に灯がつき、若い女の経を読む声がしている。不思議に思ってのぞいてみると、たまげるほど美しい女がすわっていた。

その途端、若旦那は、身体が震えだし熱が出て、枕も上がらぬ病気になり、医者よ薬よと、介抱するが少しもよくならない。占ってもらうと、この家にいる女を妻にすれば必ず病気が治るという。

そこで、女たちに化粧をさせ、着物に着がえさせて、一人一人若旦那に茶をもって行かせた。

一人が、「若旦那様、お茶をおあがりなさいませ」というと、一目見て布団に首をうずめてしまう。次々と同じ所作をするが、みんな気に入らない。もう誰もいない。

いやお鍋が残っていた。「これはどうてい見込みがないがあれも女じゃ。ものはためしじゃ」と湯を使って化粧し、着付けさせると見違えるような美女になった。

若旦那は、一目見るなり躍り上がって床から飛び出し、美女の汲んだ茶を飲んだので、お鍋が若旦那の嫁に決まった。

二人はめでたく結婚し、実家へ里帰りする。庄屋は、死んだと思っていた娘が立派な婿さんを連れて帰ってきたので、夢かとばかり喜んだという。

参考文献三野町文化史2（三野町の民俗平成一七年発刊）二〇〇～二〇一P
三野町誌（昭和五五年発刊）一〇三六～一〇三七P